

「碍」の字表記問題再考 (22) 仏教にみる障害者像

厩戸王が撰述した『維摩経義疏』の基になったのは、4世紀から5世紀初頭の中国六朝時代の天才の学僧の鳩摩羅什が翻訳した『維摩詰所説経』である。この經典には自己の救いのみを目指す小乗思想ではなく、多くの人々を涅槃の境地に導く「大乘仏教」の教えが説かれている。

大乘仏教とは釈尊の死後に興った仏教の二大教派の一つであり、出家者だけが救われるのではなく、在家者であっても仏教の教えを実践するならば、すべての人は救われることを説いた教えである。

この『維摩詰所説経』(以後『維摩経義疏』)は、主人公である在家の維摩詰が、出家者である釈尊の弟子たちとの問答を展開し、修行や思想を論難し、釈尊の教えの真理を明らかにして導くという戯曲的構成となっている。内容は「佛國品第一」「方便品第二」「弟子品第三」「菩薩品第四」「問疾品第五」「不思議品第六」「観衆生品第七」「佛道品第八」「不二法門品第九」「香積佛品第十」「菩薩行品第十一」「見阿閼佛品第十二」「法供養品第十三」「囑累品第十四」の章立になっている。

障害の表記

『維摩経義疏』における障害に関する表記については、まず「佛國品第一」に「障礙」の表記を見ることができる。

聲聞衆内。須科二文。初標其名。次唱其數。所言大者。智度論云。一切諸衆最勝故。

天王等大人恭敬故。大障礙斷故。

須因中修慧業而得斷一切煩惱一切障礙一切不善法起一切善業者唯善能遣。

聾盲瘡癩是形難也此八難以人天四輪爲除也。

(下線は筆者が強調)

障礙(以後障碍)の「碍」の字表記については本連載においてその意義を言及してきた。1981年以降、障害当事者団体より第2次世界大戦以前は「障害者」ではなく「障碍者」であった。「害」は悪いイメージを与えるものであり、なおかつ、人に対して用いるものではない。戦前の表記に変更すべきであり、そのためには常用漢字表に「碍」を追加するようという強い要望が出されていた。それに対する回答が2021年に政府より、「障碍」の表記は仏教語として存在し、負の意味を持つことから「障碍者」の表記にすることは政府としてはあり得ない旨の発表がなされたのである。その「障碍」の表記をここに確認する。

この「佛國品第一」に書かれている内容は、釈尊が毘耶離という所で多くの男性出家者とともに過ごし、その出家者たちが解脱するさまについて書かれた章である。その文章の中で「大障礙斷故」と記されている。この障碍は仏教用語で「しょうげ」と読み、意味は「障害、さまたげ、さとりを得るための障害となるもの。」(『広説佛敎語大辞典』)となっている。ここでの意味は解脱の邪魔となる悪霊を打ち破り、あらゆる障碍を断ち切ることを説いている。

さらにこの章では、卓越した福德と治を積み重ねて32種類の勝れた身体的特徴と80種類の副次的な身体的特徴を備えた身体について語られている。その中で聾盲瘡癩の表記が見られる。聾盲瘡癩は視覚、聴覚の障害により情報収集に困難を強いられている人々を表わす言葉である。

次に「方便品第二」では、次の表記が確認できる。

一生盲聾。此是苦報。二世智辨聰。邪見煩惱。治世智辨聰難。四宿植善根輪。治生盲聾難。若約行治者。持淨戒。治三塗難。樂法施。治聾盲難。修正法。云何日月豈不淨耶而盲者不見。對二日不也世尊是盲者過非日月咎舍利弗衆生罪故不見如來佛國嚴淨非如來咎。三隱穢現淨。令其證見。則悟入4云次第也。問。日日常淨。盲者不見。是盲人過。地難世智辨聰是心難佛前後是時難盲者不見。

この章は、毘耶離に住む維摩詰について縷々書かれている。在家の維摩詰は釈尊を崇敬し、善果報を積み重ね、障碍を打ち破る法に精通し、釈尊の「衆生」の意向と行いを熟知している人物であることが記されている。ここで語られている教説は、人間の身体は、泡沫の塊のようなものであると述べている。さらに、この身体は無常であり、堅固なものではなく、頼りにならないものである。老衰していき、貧弱なもので苦惱に満ち、常に変化するものであり、多くの病の入れ物なのである。煩惱の渴愛から生じる陽炎のようなものであり、永く存続することはないと説いている。その題材に盲、聾などの障害の表記が用いられている。

次の「菩薩品第四」でも盲の表記が何カ所も見られる。

是時大迦葉聞説菩薩不可思議解脫法門歎未曾有謂舍利弗譬如有人於盲者前現衆色像非彼所見一切聲聞聞是不可思議解脫法門不能解了爲若此也智者聞是其誰不發阿耨多羅三藐三菩提心我等何爲永一斷其根於此大乘已如敗種。

唯應度者。乃能見之。身子既如盲對像。何能見大座入於小室。答。大明衆生。凡有三種。一者不見大入小。亦不達其所由。此凡夫不得見聞之流也。二者雖見大入小。而不能解之。身子謂見而冥然不解。故譬之爲盲。

この章では、「覚り」について述べられ、その覚りの境地とは「あらゆる心の囚われを断って、無執着に入ることである。」と説いている。その中で盲の言葉を何度も用いて説明している。

障碍の表記については、上記に示した以外に「弟子品第三」で盲が3カ所、聾が1カ所、「菩薩品第四」には、盲が3カ所、「問疾品第五」では、盲が1カ所確認できる。この『維摩経義疏』での障碍に関する表記は、『勝鬘経義疏』と比較してかなりの頻度で登場し、教えを展開する題材に用いられている。

『維摩経義疏』で説かれることは、種がまかれることを「因」といい、現れ出るのを「果」という「因果応報」的な表現が随所に見られる。その教えのたとえとして、障碍のある人の存在を示し、他者への戒めとして用いている。その内容は差別的な意味が強く、解説することは差し控え、省略したい。

[引用・参考文献]

望月信亨・高楠順次郎『聖徳太子三経義疏上巻』世界聖典全集刊行會、1943年。

聖徳太子御撰四天王寺勸学院編『維摩経義疏乾巻』四天王寺、1976年。

聖徳太子御撰四天王寺勸学院編『維摩経義疏坤巻』四天王寺、1978年。

中村元『現代語訳大乘仏典3「維摩経」「勝鬘経」』東京書籍、2003年。

植木雅俊『維摩経・サンスクリット版全訳現代語訳』角川ソフィア文庫、2019年。